

---

# 戦場の悪魔

日向の園

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

戦場の悪魔

### 【Nコード】

N5963S

### 【作者名】

日向の園

### 【あらすじ】

一人一人の思いを胸に、生徒は戦場に赴く。  
戦争は始まった。  
生き残れ、己の自由が欲しければ。

## LOADING・

宮崎健吾<sup>みやざきけんご</sup>は震える手を強引に押しとどめようと必死だった。

カチャカチャカチャ。

彼の手に収まっている拳銃が、震える手と連動し、小刻みに音を立てる。

とてもじゃないがそんな状態では拳銃なんて狙いも定めることも出来ない、使い物になるはずも無い。

着ている制服の下にある防弾チョッキはすでに冷や汗に濡れ、気持ちの悪い感触を与えてくる、額にかくのは脂汗。

震えながら宮崎健吾は体を小さくし思う。

奴は化け物か？

自分たちは常に上位の成績を取っていた、今回の対戦高は名も知れぬ所、自分たちのような訓練を受けてきた者にとっては取るに値しない敵であった。

絶対的優位、先の言葉はこの優位と言う形で表された、結果的に敵は残り一人、パートナーもついてはいなかったし、勝てると思っていた。

そう、あくまで思っただけ。

じゃあなぜ、今、自分は震えている？

簡単な答えだ、もう彼以外、味方はいないのだからだ。

カッン……。

「ひっ！」

突如、廊下に響く靴の音に健吾は小さく悲鳴を上げる、自分の居場所がばれるにもかかわらず悲鳴を上げた理由は単純明快。

彼の心はすでに折れている。

絶対優位と言う鉄壁ともいえる心の支えが、一気に崩れ去った時点でこの勝負はもうついていた、いや、今回はおかしかったのだ、笑えるほどに。

なぜならたった一人で、たった一人で。

五人もの人間を戦闘不能の状態に陥らせたのだから。

カッン……。

命の終焉を思わせるようにその足音は彼の前でピタリと止まる。

健吾は涙で歪む視界で目の前に立つ一人の少年を見上げた、少年の手に握られているのは45口径のUSPと呼ばれる拳銃、薄暗い中、僅かな光で拳銃が黒光りする様は異様な光景といえる。

「防御壁の残量はゼロだよな？」

少年は健吾に向かって静かに問いかける、その表情は氷のように冷徹な無表情、まるで感情そのものが欠落しているような印象を否が応でも押し付けられる。

そして、その言葉に焚きつけられたかのように、健吾はその手に握る拳銃をその少年の額のと真ん中に突きつけた。

普通ならば、この時点で健吾の頭は吹っ飛んでいた筈だ、しかし、目の前の少年はそうはしなかった、USPにかける人差し指は屈伸をすることなく静止の一途を辿る。

少年は額に面前にある拳銃に臆する様子も無い、それどころか撃てるものなら撃ってみろ、とでもいいたげに少年は健吾を見据えるだけ。

健吾の手は震え、銃口が時折少年の額を優しく撫で上げる、一方、少年の銃口は時間が止まったかのようにミリ単位で動く気配が無い。強者が見せる弱者への絶対的優位、それは立場が完全に逆転したことを暗示させていた。

「引き金は引かないのか？　もしかしたら勝てるかもしれないぞ？」

強者は紡ぐ、強者の言葉を。

「はっ……っ！　っ、っ、っ、っはっっ、っ！　っ！」

健吾は自分がどのように呼吸をしているのかすらわからなくなっていた。

「どうした、少し前まで君は笑いながら俺の味方の脳天打ち抜いてただろ。今回もそうすればいい」

少年は空いているほうの手で、健吾の引き金に添えてある指に触る。

「出来ないのか？」

その言葉、その言葉で。

健吾の恐怖は許容量を超えた。

「う、う、うわぁあ  
あああああ！」

ガン！ ガンガン！

健吾の指が連続で動く、吐き出された銃弾は震えていても正確に少年の脳天へと牙を剥く、その弾が当たった瞬間、少年の頭部はグーン！ と反り返り数メートル後ろへ倒れこむ。

だが、鳴り響く銃声は一発ではない。

「はっ……ははは……ひやはははははははははは！」

健吾は下卑た笑い声をあげながら続けざまに、倒れた少年へと狙いを定めて、指を引く、引く、引く。

ドン!

直後、違う銃声が鳴る、音が止む、響くは健吾の笑い声だけ。

「はははははははは…… はははははははは…… 化け物めっ……！」

グラリ、と健吾の体から力が抜けていく、そして冷たい廊下の上へ倒れこむ。

ジワリと広がっていくのは赤い水溜り。

鉄の臭いが充満する中、倒れていた少年はムクリと起き上がった。驚くことに、少年にはおよそ外傷と呼べるものがまったく無かった。あれだけ銃弾を喰らったにもかかわらず、血液一滴も廊下には零れていない。

ブー。ー。

暗然たる校内に、無機質なブザーが反響する。

少年の右腕に取り付けられた腕輪がチ力チ力と緑の光を点滅させる、少年はその腕輪を時計を見る様に持つていく、すると、その腕輪から縦三十センチ、横四十センチ程度の薄緑に発光する長方形の画面が浮かび上がる。

「勝者	紅南高校
存命	一名 名前、黒雅峰乎 <small>こくがほうか</small>
獲得賞金	100万
ボーナス	200万 詳細 パートナー無し、存命一名のみ、 無傷他
MVP	黒雅峰乎 500万
逆転懸賞金	500万
合計	1300万

間 2:34<sup>〴</sup>

所要時

少年が腕輪の手首の動脈近くのボタンを押すと、その画面は消えた、少年の視線が死んだ健吾の方へと注がれる、みると、健吾の体がまるでパソコンに書き落とされた文字をデリートしていくように消失していく。

少年は動かない健吾に向かって口を動かした。

「化け物なのは……否定しないさ」

少年の体も徐々に消えていつている、そして再び口を開く。

「ここじゃ誰もが化け物だろ？」

「いや、やめて！」

暗く落とされた室内の中、一人の少女の悲鳴が上がる。

「いて！ このクソ女が！」

「あつ」

少女、霧中伍里きゅうじゅうりは横殴りの衝撃に一瞬意識が飛びかけた、しかし、次に来る鋭い痛みには伍里の意識は強制的に戻される。

「なんだよ、雉、随分とイイ女を入手したって連絡が入ったから来てやったが、ここまで反抗的だと俺は萎えるぜ？」

伍里は壁に縋ると、声のほうを怯えた瞳で見やった、いるのは複数の男。

なんでこんなことになってしまったのか。

思えば変だったのだ、中学二年生の時から、彼女の家は奇妙な形をした壺や、すでにあるはずの家の表札が日に日に増えていつてい

るのだ、それもちよつとづつでは無かった、一日に、自分が家から帰ると知らない人が「の壺」や「を招く表札」などを母に売りつけていた。

母はそれを嫌がる様子もなく、むしろ恍惚とした表情でそれらをすべて買い占めた、『他の人に幸福なんて行かせない』それが母のその頃になつての口癖であつた。

彼女はそんな母を見ながらも勉学には勤しんだ、そんな家庭状況だからこそ自分がどうにかし無くては、と言う本能が働いたのか、こんなダメな親から早く離れたいと思つたのか、今の彼女にしてみたらどうでもいいこと。

必死に勉学を続けた彼女は必然的にちゃんとした公立の高校に見事受かつた、しかし喜んでくれるものなどいない、母にいたっては『買ったの恩恵』など愚弄をこぼし、その類の購入に拍車がかかつたのは皮肉以外の何物でもない。

そして、必然の事件が起きたのは、彼女の卒業の日。

父親の蒸発、それは溜まつた借金がそうなのか、はたまた既婚男性が抱える秘密の悩みか。

もともと一年、彼女の家庭が保つたのが奇跡なのだ、何処の闇金に手を出したのか、裕福層でもない彼女の家庭は一度崩れた途端、決壊した、母は『なぜこんな不幸が、何の所為？』と家の中をグルグルと徘徊し始めたのもこの時だ。

数日後、悲惨な出来事はさらに加速する。

家にいることが辛くなつた彼女は外出が日課、そして深夜、家に戻るときであつた。

家の玄関の前に見知らぬ男性が一人、そしてその傍らには母親が。

この時点で彼女は限界を迎えた。

「お母さん！　いつまでこんなことしてるのよ！　もうやめて！」  
中学二年から数えて、オカシクなった母に対して初めて投げかけた言葉がこれかも知れない。

そして、母が放った言葉は

コノ娘が私ヲ不幸ニシテルノ！　早くコノ娘ヲ買取ッテ！。

その後の記憶は彼女にとって曖昧だった、何かが壊れた音が響き、何かに促されるように乗せられて、気がついたときにはこうなっていたのだ。

「おい嬢ちゃん、もう諦めな、どうなるかはわかってんだろ？　反抗しねえなら優しくしてやるからよ」

先ほどの雉と呼ばれた男が伍里の肩に手を伸ばす、伍里は反射的にその手をはじいた。

それがいけなかった。

「このクソヤロウが！　もう我慢ならねえ！」

反抗する暇も与えず、男によって伍里は床に組み伏せられる、頭を押さえられ無情に冷たいコンクリートの床が彼女の恐怖に拍車をかける。

「いや、いやああああ！」

「ははっ、恨むなら自分を恨むんだな！」

なぜ自分を恨まなければいけないのか、伍里は男の言葉を反芻すると疑問を置く、自分は何も悪くないはずなのに、悪いのは母、あんな偽りだらけの物を金で幸福が買えると軽薄な言葉を吐いた男たちだろう。

しかし、考えてわかった。

それらをひつくるめて、そんな状況に身をおかされた自分を恨むしかないのだ、と。

伍里はすべてを諦めた、もうどうでもいい……全てがどうでも良くなった、抵抗するのも無駄だとわかった、体力の浪費だ、どうせ逃げられないのだから。



伍里は自分の考えに完結しようとした。

瞬間、その思考を引きちぎるように火薬の爆音が狭い室内で鳴り響く。

正確には銃声、しかし、その音は伍里にとって聞きなれない音だったためわからなかった、その銃声と同時に体にのしかかる重量感、そして首筋に流れる生暖かいもの、何事かと思い伍里は顔を、のしかかって来たものへと視線を向けて、目を見開いた。

先ほどの雉と呼ばれた男が死んでいる、そして生暖かい何かは言うまでも無いのだ、雉の額には何かが強引に通過した穴が開いている、それだけでその何かは言葉にする必要性がない。

「ひっ！ き、きゃあああああああ！」

ドン！ ドン！ ドン！ ドン！

伍里の悲鳴にあわせるように銃撃音がリズムカルに響く。

銃声の都度、男たちのうめき声と共に崩れ落ちる音、それにツンと鼻を突く異様な臭い。

静寂と言う幕が下りた中、震える伍里に声がかかる。

「怪我は無いか？」

その言葉は今の伍里にとって場違い以上の言葉。

「え？」

伍里は声のほうを向く、そこにいたのは自分と同一年程度の青年と少年の中間ほどの黒い学ランを着こなした少年。

少し癖のついた長めの漆黒の髪の毛は綺麗に曲線を描いていて、前髪は目元を隠さないギリギリの所で自然にきりそろえられている、瞳も黒が多く鼻筋もまっすぐで高くて小さい、こんなところにいる事自体が場違いなのではないかと思わせるほどの好青年だった。

だが異様。

片手に握られている黒い物体は先ほどの音の正体、それが握られているだけで、少年はこの状態に縛り付けられるほどの統合性と共に異常を醸し出している。

「え、えつと？ あなたは？」

とりあえず、といった感じで伍里は咄嗟に思いついた質問を投げかける、しかし。

「うわ……あ」

突如少年は顔を真つ赤にしたかと思うと、自分の学ランの上を脱ぎ始める、もしやと思い身構える伍里だったがその思いは杞憂に終わる。

ボフという音と共に伍里の視界が真つ暗になる、慌てて投げられた物をつかむとそれは少年が着ていた学ランだった。

「？ ？ ？」

頭にはてなを浮かべる伍里に少年は居心地悪そうに頬を掻きながら。

「えつと……その、な？ と、ととと、とりあえずその姿は不味いからっ、そ、それ、は、羽織ってて！」

呂律の悪い言い草でそう言つと、少年は視線を伍里に一度向けて再びものすごい勢いでブン！ と逸らす。

その姿……伍里は自分を見ると、目のも留まらぬ速さで学ランを着込んだ。

ここでは書いてはいないが、彼女の身につけているものは乱暴によりほとんどが破れてしまっている、最後の砦は無事だが、はたから見たらその姿は不味い。

「ご、ごごごめんなさい！」

「い、いや、謝らなくても」

互いに顔を背けたまま二人は気まずい空気へと流れ込む。

何か話さなくてはと思ったのは伍里、先の質問を繰り返す。

「あなたは。誰？」

ゆっくりと気まずい空気の中伍里が声を響かせる、それに縋るよ

うに少年はこっちを向くと。

「えっと、俺は、黒雅峰乎……君を助けに来た」

その言葉を消化するのに、伍里はひどく時間がかかった。

「と言うか、君を紅南学校に入学させに来た、かな？」

そう言つと、峰乎と名乗る少年は微笑む。

それが本当に幸か不幸かは今のところはおいて置くとしよう。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5963s/>

---

戦場の悪魔

2011年4月19日23時06分発行